

「行ってらっしゃい」

坂本 ユミ子

「ありがとう」
「ごめんなさい」

どの国にもある言葉だ。海外旅行をする時、「こんにちは」と一緒に覚えておきたい言葉だ。言わなくてはいけないときに言えない言葉でもある。特に一番近い家族に言えない。言わなくても分かっているだろうと、省いてしまう。言葉には心が宿る。言わなくては伝わらないときがある。「ありがとう」と「ごめんなさい」が素直に言えていたら、私の人生は変わっていたと思う。きっと、もっと自分を好きになれていただろう。

「行ってらっしゃい。」

「行ってきます。」

この二つの言葉は他の国にあるのだろうか。ひよっとしたら日本だけにある言葉なのかもしれない。母はこの二つの言葉を大切にしていた。

「どんなに腹を立てても忙しくても、家を出るときは笑顔で『行ってきます』。送り出すときは『行ってらっしゃい』を欠かしたらダメだよ。」

母に言われていたのに…。

災難は突然やって来た。十年前、パン工場で働いていた時だった。空のパン箱を洗い場に持ってゆく途中、台車につまづいて転んだ。台車の上に転んで右胸と右足を強く打った。鉄製の大きな台車だった。一瞬、何が起きたかわからず、目の前が真っ暗になった。周囲の人たちが駆けつけて、

「大丈夫か！」

「大丈夫？」

声をかけてくれたが、息ができなくて言葉が出なかった。

「救急車を呼べ！」

主任さんの声で我に返った。

「だ、大丈夫です。大丈夫ですから…。」

私は立ち上がった。大丈夫ではなかったが、救急車は嫌だった。

「すみません。お騒がせして。」

その日は痛みを我慢して、なんとか仕事を終えて帰宅した。翌日になってもひどく痛むので近所の医者に行った。右脚は打撲だけだったが、右胸の肋骨を骨折していて、全治二ヶ月だった。事故は一瞬の出来事なのに、二ヶ月も不自由な思いをした。労災保険はありがたかった。

振り返ってみると、事故が起きた原因は一つではなかった。空のパン箱をいつもなら二つなのに、五つ両手で持っていたので、足元が見えなかった。いつもは荷物が積み上げてある台車が空だった。残業続きで体が疲れていたの、注意散漫だった。いくつもの原因が重なって事故が起こる結果となったのだが、一番の原因は私の「心」だったのかもしれない。

事故が起きた日の朝、私は夫とケンカした。ケンカの原因はもう忘れてしまった。些細なつまらないことでケンカするのが夫婦なのかもしれない。私は嫌な気分のまま、「行ってきます」も言わないで家を出た。腹いせに玄関のドアを思いっきり閉めた。ドアは私の怒りが乗り移ったように大きな音を立てて閉まった。

工場へ向かうバスの中でも私は怒っていた。仕事が始まっても、腹立ちは収まらなかった。心の中で夫に悪態をついて、イライラ、ムカムカしていた。仕事に集中していなかった。そのことが一番の原因だったと思う。事故が起きるとき、マイナス思考のときが多いのではないだろうか。

短気は損気。腹を立てると、ロクなことがない。怒る前に十数える。分かってはいるが、いざ腹が立つと頭の中は「怒り」でいっぱいになってしまう。母の言葉も頭の中から飛んでいた。

「どんなに腹を立てても、忙しくても家を出るときは笑顔で『行ってきます』。送り出す時は『行ってらっしゃい』を欠かしたらダメだよ」
それは母が身をもって体験したことから生まれた言葉だった。

結婚以来九年間、父の見送りを母は欠かしたことがなかった。母はいつも角を曲がって父の姿が見えなくなるまで見送った。娘たちが生まれると、娘たちともに見送った。父は何度も振り返って、手をふった。その朝のひとときが母は好きだった。

あの日の朝、母は父を見送らなかつた。前夜、父と母は些細なことから大ゲンカになった。翌朝まで母の怒りが続いていて、父を見送る気にならなかつたそうだ。あの日、一九五九年八月三十日、父は東京へ出張した。翌日、出張先で交通事故に遭い、帰らぬ人になった。

当時、私は二歳だった。四歳と六歳の姉たちは父の記憶があるが、私は何も覚えていない。私の知っている父はアルバムの中、白黒写真の父だけだった。母は私に父のことをよく話してくれた。

父は東大阪で小さな町工場を経営していた。大企業の孫受けで電気製品の部品を作っていた。お金がたくさん貯まるようにと父が付けた名前は「タマル電気製作所」。工員が十人ほどの小さな工場だったが、父の夢は大きかった。「松下幸之助の二股ソケット」に負けないう、人に役立つ小さな大発明が夢だった。

母には親が決めた婚約者がいたが、母は父と一緒にたかつた。結納が来る日の朝、母は静岡の実家を飛び出し、奈良の父の元へと逃げた。実家は大混乱。

「もう、親でも娘でもない！ 一生、家に帰ってくるな！」

祖父は母を勘当した。その時、母は二十一歳だった。何の約束もしていなかつたのに、父は母を受け入れた。

「お父さんはお母さんのことが好きだった。目と目を合わせれば気持ち分かるものなのよ。」

母は自信満々に言うけれど、私は信じられなかつた。父が生きていたら父に本当にそうだったのか聞いてみたい。二年後に勘当が解けてめでたく父と母は結婚した。三人娘が生まれ、家事育児に追われながらも母は幸せだった。でも、幸せは続かなかつた。父は不慮

の事故で帰らぬ人となった。一年も経たないうちに工場は倒産した。元々経営がうまくいってなかった。母は実家に帰らず再婚もせず、女手一つで三人娘を育て上げた。

「婚約者と結婚した方が幸せだったかもしれないよ。」

と言ったことがある。母はとんでもないと言う顔になって、

「後悔したことなんてないよ。九年間だったけど、幸せだった。お父さんと結婚しなかったら、一生後悔したよ。あなたたち三人は生まれてなかったし…。でも、一つだけ後悔していることがある。」

母はあの日のことを私に話した。父が亡くなる前日の朝のことを。

「行ってきます。」

父は母に言って家を出た。でも、母は何も言わなかった。父を見送らなかった。

「あの朝が最後だったのに…。」

母は父を見送らなかったことをずっと後悔していた。「行ってらっしゃい」を言わなかったことを…。

外に出ると何が起きるか分からない。父と母のように永遠の別れになるかもしれない。毎日、家を出て家に帰ってくることをあたりまえのように思っていたけれど、それは奇跡なのかもしれない。

「行ってらっしゃい。」

この言葉には、

「気を付けて行って、無事に帰ってきて下さい。」

家族の願いがこもっているのかもしれない。